

見えない心を見るために

香川県 高松市立龍雲中学校 3年

河渕 なずな（こうぶち なずな）

私の通う中学校は、在校生数が千人を超えるマンモス校だ。そのため下校時にはたくさんの生徒や自転車でごった返す。その日、私は部活動を終え自転車で信号待ちをしていた。歩道は変わらず自転車の列で溢れていた。その中を青信号の横断歩道に向けて、一人の男性が歩いて来た。ポロシャツにリュック、手には白杖を持っている。私は咄嗟に「あ、この人は目が見えないんだ。自転車を避けなくて大丈夫かな。ぶつからないかな。青信号を渡れるかな。」と思いじっと見ていた。けれども私の心配をよそに、その男性は器用に自転車の間を通り抜け、青信号を渡って行った。

「あんな人混みをぶつからずに通るなんて凄いな。」私は安心と驚きが混ざったようなこの気持ちを早く伝えたくて、玄関のドアを開けるなり母に話し掛けた。

「さっきね、学校の前で男の人が歩いてってさ、自転車にぶつかりそうで危なかったけれど、そのまま横断歩道を渡って行ったんよ。白杖をついとったから目が見えないんだと思うけど、凄くない？」

母は私の話を聞き、それは同じ職場で働く同僚ではないかと言い、その男性の話を聞かせてくれた。

「〇〇さんは、目はよく見えないけれど他の人と何も変わらないよ。行動力があって掃除をお願いしても、順序や物の場所を最初に説明すれば無理ですと言うことはないよ。職場では白杖も持たずに移動しているし、外を走る車や室内の音から、自分がいる場所もわかるみたい。そう言えば、〇〇さんが聞いている音声情報が凄く速くて他の人は殆ど聞き取れなかったことがあったよ。」

母の話を聞いて私は言葉が出なかった。小さい頃からより多くの情報を耳で得てきた結果、速さにも対応できるようになったのだ。また母も初めは何でも手助けしなくてはと思っていたが、今では普段と違うことがあれば伝えたり、困っていれば手助けしたりするだけにしているようだ。ひとりで何でも出来ることも、周りも特別扱いしていないことも私が想像していた「目の見えない人」の状況とはまるで違っていた。

ある日、担任の先生が道徳の時間に絵本を紹介してくれた。ヨシタケシンスケさん作の『みえるとかみえないとか』。環境や体の違いを宇宙の星や車にたとえ、人について分かり易く疑問を投げ掛けている。絵本なんて子どもが読むものだと軽く考えていた私だったが、先生が聞かせてくれた内容がとても奥深く、改めて

図書館で借りて読んでみた。

住む星が違えば、それまで当たり前だったことがかわいそうだとされたり、驚かれたり、気を遣われたりする。いつもは出来ていたことが、とても不便に感じることもあった。私は過剰な気遣いが同情されているようで嫌だった。自分と違うことは、分かっているようで実は全てを理解することは難しい。同じ所や違う所を互いに理解して寄り添い、思いを伝え合うことで心は繋がる。そうして居心地の良い場所が生まれるのではないか。

私は自分の過ちに気が付いた。目が見えないことをかわいそうだと特別視していた。その特別視が同情や偏見、差別を引き起こしてしまう。知らず知らずのうちに自分も差別に加担していたのかと思うと恐ろしい。また相手を想うことは大事なことだが、手助けや優しさも必要とされていなければ、ただの押し付けになってしまう。私は目が見えるが、目の見えない人は、私には聞こえない音を聞き取り、私には感じない感触を感じ取っている。人には得意なことや苦手なことがあるように、目が見える、見えないということは、特別なことではなくただそれだけのことではないのだろうか。

今、世の中はバリアフリーからユニバーサルデザインへと変化している。当初は障がい者用トイレと認識されていたトイレも、今では多機能トイレとして必要とする人が誰でも使えるようになってきている。また、駅利用者の安全を考えた線路への落下防止対策として、ホームドア設置の必要性も高まっている。

全ての人々が互いに人格や個性を尊重し支え合い、それぞれの多様性を認め合っ社会に参加していく「共生社会」の実現に向けて、人の心もユニバーサルデザインへと変化していかなければならない。教育現場では「インクルーシブ教育」という全ての人々が共に学ぶという仕組みも少しずつ浸透している。小さな頃から色々な違いを特別視せず、仲間として過ごし学ぶことは、偏見をなくす第一歩となるのではないだろうか。

私もいつか目が見えづらくなったり、歩きづらくなったりする時が来るだろう。眼鏡を掛けたり杖をついたり、誰かに手をとってもらえるかもしれない。必要とする人がいつでも手をとることができ、必要な手を差し出すこともできる世の中へ。見えるものだけではなく、見えない心の中の気持ちも見していきたい。

